

テ形・音便・アクセント

笠間, 裕一郎
九州大学大学院 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/1551332>

出版情報 : 語文研究. 118, pp.29-49, 2014-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

テ形・音便・アクセント

笠 間 裕一郎

1. はじめに

これまでの研究においては、形態音韻論的現象である「音便」とアクセントについては獨立に論じられてきたところである。特にアクセント資料に差聲された聲點の反映するアクセントの年代に関しては、基本的にその資料に於ける聲點の差聲年代を元に決定され、形態音韻論的現象である「音便」をはじめとする、他の文法現象との連絡は、基本的に考へられることがなかつたと言つて(注1)良い。

此の様な狀況は、各アクセント資料の「相對年代」については、妥當な結論を導き出すものであるが、その他の現象との整合性が取れなくなる。

今回指摘する、「音便」とアクセントの關係もこの一つである。即ち、「助詞テ」による「音便」形の發生は、平安時代中期には（少なくとも）さかのぼる。當時代のアクセントを反映すると言ふ『日本書紀』聲點本諸本においては、まだ「助詞テ」の動詞内部への取り込み、即ち「テ」自體のアクセントを失ふことにより生じる「接辭化」（或いは「倚辭化」）は生じてゐないと考へられる。

ところで、「助詞テ」によるカ行「イ音便」形の形態的定着は、迫野虔徳（1971）によれば鎌倉時代であるが、これは金田一春彦（1969）によれば「助詞テ」の動詞内部への取り込み、即ち「接辭化」の完了時期とほぼ同じである。

また秋永一枝（1991）は、「助詞テ」が『古今和歌集』聲點本においては、それ自身のアクセントについて搖れてゐる事を明らかにしてをり、また、「音便」形は文體論的表現價値を持つて非「音便」形と共存してみたと見られることが、小松英雄（1981）に於て指摘されてゐる所である。

先に述べた様に、『日本書紀』聲點本では「助詞テ」のアクセントは先行する動詞とは獨立してをり、まだ「接辭化」（或いは「倚辭化」）は生じてゐない。また、上代語資料において「助詞テ」による「音便」現象は生じてゐないと考へられてゐる。

一方で、古今和歌集と『日本書紀』の中間に存在する資料である『琴歌譜』では、既に「助詞テ」がそれ自身のアクセントを失つてゐる例が見られる。

此の様な状況を鑑みて本稿では、「助詞テ」の「接辭化」即ちアクセントの消失の過程と「助詞テ」による「音便」現象の發生は並行的現象ではないかとの豫想の下考察を進め、同時に『日本書紀』聲點本の聲點が示す所のアクセントは、貞觀年間以前のものである可能性があることを指摘する。

2. 注意點

本稿では、倚辭・接辭といふ用語を使用するが、これは次の様に定義される。

倚辭＝種種の「語」と共起し文法的に獨立してゐるが、音韻的にはある「語」(ホスト)に依存してゐる形態素。

接辭＝ある種の形態素としか共起せず、文法的に獨立してをらず、また音韻的にもある形態素に依存してゐる形態素。

以上の議論を表にして纏めると次の様になる。

表1 形態素の分類

音韻\文法	獨立	非獨立
獨立	自立語	付屬語
非獨立	倚辭	接辭

この表の中で「付屬語」と言ふ單位が、「倚辭」とは異なる單位として認められてゐるが、これは、例えば文法的には「語」の内部要素として振る舞ひながら、一方で音韻的には先行する形態素とは異なる振る舞ひ(例へばアクセント(注2)情報が常にそこにある)をしてゐる形態素のことである。

日本語においては、音韻的に獨立してゐるか否かの判断にはアクセントが用ゐられる。本稿でも各種の聲點資料に反映されるアクセントに基づいて、音韻的にその形態素が獨立してゐるか否かを判断する。

また、形態素の順序を考へるときには、次の様なフレームが用ゐられる(BOOIJ (2012)を参照した)。

[屈折接頭辭－派生接頭辭－語根－派生接尾辭－屈折接頭辭]

本稿でも、このフレームに基づいて考察を進めて行く。

3. 「助詞テ」と「音便」

3.1 鎌倉時代の「助詞テ」とそれによる「音便」

鎌倉時代のアクセント資料として、『四座講式』は著名であり、これについての研究としては金田一春彦(1969)がつとに存在する。

今回問題としてゐる「助詞テ」に就いても同論文で論じられてをり、その結論は、「助詞テ」は既に動詞側に取り込まれてゐると纏められるところである。

今、金田一春彦（1969）の纏めるところを表にして示すと以下の通りである。

表2 『四座講式』の動詞「テ形」のアクセント

て（固有の型 H）	HH 型	HL 型	LL 型	LH 型	LF 型
節博士	斗斗斗	斗十十	×	十斗斗	十斗十
ピッチ	HHH	HLL	×	LHH ^(注3)	LHL

（金田一春彦（1969）545・557頁を参考に作成。トネームなどは、私に英字表記（アクセント素表記）に改めた。）

金田一春彦（1969）によれば、HH 型に属するのは「得」「見る」の連用形、LH 型に属するのは金田一語類動詞第二類の四段活用・ラ行變格活用・上下二段活用の動詞の連用形である。

上表を見れば分かる様に、先行の動詞語幹と「助詞テ」の間には「語」の境界を示す様な「アクセントの谷」は存在しない。先行する動詞語根部末のピッチと「助詞テ」のピッチが異なるのは LF 型に付いたときのみであるが、これは屋名池誠（2004）の様に拍内下降の實現の原因を語末の下げ核に求めるならば、二拍目に下げ核が存在し、その結果として「助詞テ」のピッチが [L] に下降してゐるからと考へられる。

結局、『四座講式』を見る限り、「助詞テ」は屋名池誠（2004）の言ふ通り、動詞内部の一要素であり、屈折パラダイム上、連用形接尾辭や連體形接尾辭などと對立する一形態素 //te// となつてゐると考へられる。

また、迫野虔徳（1971）によれば、この時代に至つて、カ行イ「音便」の性格の變化が生じ、「もと特殊な連音上の音韻變化現象であつたが、四段活用動詞の連用形を規則的・恒常的に襲うようになってそれ自体形態の意味をも持つようになった（サ行を除く）」。

カ行イ音便は、元々語彙的な例から生じたと考へられるところだが、その後逸早く動詞「テ形」に於て生じる（坪井美樹（2007）参照）。此處から、文法現象としてのテ形の「音便」が存在してゐる鎌倉時代は、同時に「助詞テ」の動詞内部への取り込みが完了してゐる時代であると言ふ事が出来る。

これは大變興味深いことである。なぜならば、迫野虔徳（1971）では、音便に纏はる共時態として

1、口頭言語においても、「讀みて」「書いて」のごとく発音され、いまだ音便

の形を知らなかった時代

2、「読んで」「書いて」の形が、その非音便形と文法的には等価のものとして併用された時代

3、「テ」「タ(リ)」等に接続するときは必ず音便形をとり、非音便形は専ら中止法などに使用されるというように、相互に機能の分担がなされるようになった時代

(以上追野虔徳(1971)より)

の三つを考へてをり、鎌倉時代は3に該当する時代であると言へようが、同時にアクセントから見たときには、先に述べた様に「助詞テ」は動詞内部の一要素(此處では接辭)となつてゐるからである。

此の様な並行的な現象から、次の様な豫想が得られる。即ち、「助詞テ」による「音便」形の形態的定着と「助詞テ」の動詞内部への取り込みには相關性があるのではないか

更にもう一步進むと、

「助詞テ」の動詞内部への取り込みが「助詞テ」による「音便」形を生じさせてゐるのではないか

といふ豫想が得られる。

以下では、この豫想を全體的な差聲傾向から検討する。まづ『日本書紀』聲點本を對象に検討する。その後『日本書紀』聲點本の聲點が示すところのアクセントの年代について、『琴歌譜』を参照して考察した後、『古今和歌集』聲點本及び『類聚名義抄』諸本を對象として検討する。

3.2 『日本書紀』聲點本に見える「助詞テ」のアクセントと奈良時代の「助詞テ」による「音便」

ここでは、『日本書紀』聲點本の「助詞テ」のアクセントと、奈良時代の「助詞テ」による「音便」に就て見てみる。

まづ後者から見ると、廣く認められるところによれば、奈良時代には「權」(カイ)等のごく少數の語彙的に生じてゐる「音便」を除いては、「音便」は生じてゐなかつたとされてゐる。築島裕(1987)によれば、此の様な、語彙的に生じる「音便」にせよ、文法的な「音便」にせよ、まづカ行イ「音便」から生じたとされる。上に述べた「權」(カイ)の例はその先驅的な例と言へよう。此の様な狀況であるから、「助詞テ」による「音便」はこの時代にはまだ生じてゐない。

次に、鈴木豊（1988）（2003）を用いて、『日本書紀』聲點本の「助詞テ」に見られる差聲について調べてみると、次の様になる。

表3 『日本書紀』聲點本の「助詞テ」に対する差聲状況

		訓 注			本 文			總計
		計	上聲點	平聲點	計	上聲點	平聲點	總計
神代	鴨	6	6	0				6
	弘	3	3	0				3
	乾	8	6	2				8
	圖	0	0	0				0
	嘉	2	2	0				2
	明	4	0	4				4
	丹	0	0	0				0
人皇	岩	1	1	1	8	8	0	9
	前	40	35	5	15	9	6	55
	圖	8	7	1	23	19	4	31
	北	1	1	0	22	20	2	23
	熱	2	1	1	20	18	2	22
	右	5	4	1	50	43	7	55
	内	5	4	1	51	42	9	56

（鈴木豊（1988）（2003）を元に作成）

（略記號は以下の通り。鴨=鴨脚本、弘=弘安本、乾=乾元本、圖=圖書寮本、嘉=嘉曆本、明=明德本、丹=丹鶴本、岩=岩崎本、前=前田本、北=北野本、熱=熱田本、右=兼右本、内=内閣文庫本。なほ『日本書紀』聲點本での「助詞テ」に対する差聲は、すべて先行要素が動詞である例に對してなされてゐる。）

差聲には若干のばらつきが見られるところであるが、明德本を除いて、一貫して上聲點が差されてゐる。

ところで、『日本書紀』聲點本によるアクセント研究としては屋名池誠（2004）が存在し、そこでは次の様に纏められてゐる。

表4 『日本書紀』聲點本の動詞+「助詞テ」のアクセント

動詞系列	+			-		
語例	イテ(射)	[前14訓]	LH	シテ(爲)	[前14訓]	F○
	アリテ(有)	[前14訓]	LHH	オキテ(置)	[北26文]	HLH
	タマヒテ(給)	[前11訓]	LLHH	カタリテ(語)	[前14訓]	HHLH
	カシコミテ(畏)	[圖22文]	LLHLH	アザムキテ(欺)	[前14訓]	HHHLH

（引用にあつて僅少の變改を加へた。○は聲點なし。）

屋名池誠 (2004) では、『日本書紀』聲點本の示すところのアクセント體系では、動詞は語末に下げ核が存在するタイプ (+ 系列) と語末から - 1 拍目に下げ核が存在するタイプ (- 系列) の二つに分けられる。

+ 系列に關して、語末の下げ核が存在すると考へるにも拘らず、それによる下降調の出現を考へない點と、若干の例外について、どの様に處理したかは述べられてゐない點、また、「シテ」に就いては、「助詞テ」に對して差聲した例も存在し、改めて解釋を要する點に問題が存在する。

後二者については後に 5. 2 で検討するが、前者については、ここでは問題にならない。なぜならば、「助詞テ」がそれ自身のアクセントを失つてゐるならば、+ 系列の動詞であつても、- 系列の動詞であつても、「助詞テ」のピッチは [L] (聲點は平聲點) で現はれるはずであるからである。

さて、上表で纏めたところについて屋名池誠 (2004) では、「……HLH というかたちで二つの丘があらわれているので、これらはこの時代のこの体系では 1 語と考えることはできない。テは+ の動詞に付いているときも、- の動詞に付いているときも○ (高) というアクセントを保っているので、動詞とは別の独立の語 (助詞) と考えるべきものである。これを切り離すと、残りは連用形のアクセントそのものである。連用形で一語の動詞が完結し (中略)、その後には別語の助詞テが続いているわけである。」と述べられてゐる。

従つて、表 3 を参考に屋名池誠 (2004) の見解に従ふならば、先の豫想通り、『日本書紀』聲點本の聲點が示すアクセント體系を持つ言語では、まだ動詞内部への「助詞テ」の取り込みは生じてゐないと考へられる。

ここで、『日本書紀』聲點本の聲點が示すアクセント體系を持つ言語が一體何時の日本語であるかの問題が生じる。従來の見解では、『日本書紀』聲點本の示すところのアクセントは「岩崎本の加點年代により、声点注記が始まったのは平安時代中期以降と推測される。他の諸本の万葉仮名部分の声点も平安末頃までのアクセントを反映すると考えられるが、傍訓の片仮名に注記された声点は鎌倉時代以降のものも交じるかと考えられる。」とされる (秋永一枝他 (1998))。

ところが、既に岩崎本『日本書紀』に於て、聲點の差違へが生じてゐることが明らかにされてをり、此の様な事實から、岩崎本『日本書紀』の聲點は、何らかの祖本によつて差されたものと想定される (鈴木豊 (2010) 参照)。

とすれば、これまで考へられてきたよりも (少なくとも岩崎本) 『日本書紀』に差された聲點から知られるアクセントは、平安中期よりも前の時代のアクセントである可能性が存在する。

その可能性を検討するために、平安初期の國語史料であり、アクセント資料としても有用である『琴歌譜』における「助詞テ」に就て見てみることにする。

3.3 『琴歌譜』による検討——動詞「出づ」+「助詞テ」のアクセントによる——

『琴歌譜』の成立年代については、夙に西宮一民（1959）の論考があり、そこでは貞觀七年以前とされる。更に土橋寛（1978）は曲名の下に記された歌詞と上下などの記號が付されてゐる聲譜の成立年代について、上代特殊假名遣の殘存狀況から、前者については「弘仁年間を想定するのが自然であらう」と述べてゐる。また、アクセント資料としては沖森卓也（1985）の考察があり、「琴歌譜に付された「上」「中」「下」の注記は、平安時代末期京都方言のアクセントと全く同じであるとは言えないが、大きく矛盾することはなく、全体としてより古いアクセント体系を示していると考えられる。」「琴歌譜の注記は平安時代初期以前のアクセント資料として十分活用できるものと思われる。」と述べられてゐる。

現存する『琴歌譜』の書寫年代は、卷末の奥書によれば天元四（981）年であり、アクセント資料として有用な「上」「下」等の朱により書かれた記號も、或いはその年代にまで下る事も考へられるが、朱による記號が存在しなければ、「譜」としての意味をなさない。

そこで、朱による記號も聲譜の成立年代同様に考へると、『琴歌譜』に現はれた「助詞テ」には興味深い振る舞ひを示してゐるものがある。

(1) a. つきをよろしみ 出でて（伊弓_上豆_下）居れ 清水（阿遊阿扶理）

他の「助詞テ」に對する注記は、

(1) b. さ根こじに いこじ持ち來て（弓_上）（歌返）

が、存在するのみで、計二件しかないが、(1) a の例の「助詞テ」は、明らかに「出づ」の語末の下降によつて低く現はれてゐる。

『日本書紀』聲點本には、同じく「出でて」に對する次の様な差聲例が存在する。

(2) 出でて行かな
熱 平上上上上平

内 平上上上上平

右 平上上上上平（『日本書紀』卷第五16番歌謠）

（平＝平聲點、上＝上聲點、略記號は、熱＝熱田本、内＝内閣文庫本、右＝兼右本）

「助詞テ」に先行する動詞がおなじく「出づ」連用形でありながら、『日本書紀』聲點本では一貫して「助詞テ」に対して上聲點が差されてゐるのに対し、『琴歌譜』では低平調（＝[L]）を表す「下」が記されてゐる。

『琴歌譜』の「助詞テ」に対する差聲件数は僅少であるが、此の様な例から考へるに、貞觀年間以前には、既に「助詞テ」が先行する動詞によつては、それ自身のアクセントを失ふ事が有つたと考へられる。

ここから、『日本書紀』聲點本に差された聲點の示すところのアクセントが貞觀年間以前のものである可能性が十分に出てくる。更に先の假説、「〔助詞テ〕の動詞内部への取り込みが「助詞テ」による「音便」形を生じさせてゐるのではないか」からすると、上代語においてはテ形による「音便」がまだ生じてをらず、同時に屋名池誠（2004）の主張に従へば、常に「助詞テ」は高いピッチで現はれてゐるので、動詞内部への取り込みも生じてゐないのだから、『日本書紀』聲點本の聲點が示すアクセント體系を持つ言語は奈良時代日本語であることも十分に考へられる。

ところで、『琴歌譜』に存在する、ピッチが[L]で現はれる「助詞テ」は「接辭」であるだらうか、それとも「倚辭」であらうか。

『琴歌譜』には例が存在しないものの、平安時代中期以降の資料から考へるに、まだこの時代には「助動詞ズ」＋「助詞テ」の例が存在したと考へられ、前者は「屈折接尾辭」、或いは屈折接尾辭相當の「付屬語」（此の様な接尾辭相當の「付屬語」を、以降「接尾語」とする。）である。従つて、この「助詞テ」は「語」の内部要素（ここでは即ち「接辭」）とはいひがたい。

となれば、この「助詞テ」は文法的には獨立してゐるが、音韻的には依存してゐる「倚辭」と考へるのが自然である。

3.4 小 結

ここまでの議論を纏めると、次の様な小結が一先づ得られるだらう。

- (3) 『日本書紀』聲點本をマクロな觀點から見る限り、一應は『四座講式』に見える鎌倉時代とはちようど對照的に、「助詞テ」の「語」内部への取り込みは生じてをらず、「助詞テ」はアクセント的にも獨立してゐる。

- (4) 一方、平安時代初期のアクセント資料である『琴歌譜』では、「助詞テ」がアクセント的に獨立してゐない例が見られる。
- (5) 以上より、『日本書紀』聲點本の聲點が示すアクセント體系を持つ言語は、貞觀年間以前の日本語である可能性がある。
- (6) また、「助詞テ」は「自立語」から「倚辭」へ移行した後、鎌倉時代にいたつて「接辭」となつたと見られる。

以下では、まづ上記の小結の内(6)に就て、『古今和歌集』聲點本及び『類聚名義抄』諸本を用ゐて検討を加へて行く。その後、ミクロな觀點から見たとき、猶(3)(5)が支持されうるかについて考察を加へて行く。

4. 検 討

4.1 『古今和歌集』聲點本に見える「助詞テ」のアクセント

ここでは『古今和歌集』聲點本を対象に、「助詞テ」のアクセントについて『日本書紀』聲點本同様、まづマクロな觀點から考察を加へて行く。

「助詞テ」のアクセントについて考察を加へる前に、平安時代語の音便について簡単に確認しておく。

同時代に於ては、既に「音便」が生じてゐたされ、「助詞テ」が後接した場合にも「音便」が既に見られる。^(注7)

次に、「助詞テ」に對する差聲狀況について確認をする。既に同様の表が秋永一枝(1991:178)に見られるが、改めて他の「助詞」が先行して居る場合なども勘案して表を作成した。表5を参照。猶、「音便」形+「テ」に差聲された例は残念ながら存在しない。

『日本書紀』聲點本に於て差聲のある「助詞テ」に先行するのは、すべて動詞であつたが、『古今和歌集』聲點本及び『類聚名義抄』諸本では「テ」を含んで副詞となつてゐるもの、異なる助詞が先行するもの、また、「モテ」の様に先行研究では助詞とされるものが存在する。これらに就いてはまた別に(全體の中で)延べ何例あるかを擧げてゐる。「ふりはへて」は意味が「わざわざ」に變はつてゐるので、「モテ」同様に別に集計してゐる。

また、草創期・發展期・衰微期は秋永一枝(1991)の分類で、夫々院政期・鎌倉時代・南北朝から室町前期に言語形成期を迎へた人物による差聲資料であることを示す。

「助詞テ」に對して動詞が先行する例だけで十以上存在するのは、顯天片、伏片、家、梅、毘、高貞、訓の諸本であるが、訓以外は何れも上聲點が優勢で

表5 『古今和歌集』聲點本「助詞テ」に対する差聲状況

	略稱	全 體			副詞 or 助詞先行		ふりはへて、もて	
		總計	上聲點	平聲點	上聲點	平聲點	上聲點	平聲點
草 創 期	問 答	4	3	1				
	顯天平	10	7	3				
	顯天片	3	0	3				
	顯大	1	0	1				
	顯府	4	2	2				
	伏片	30	26	4	3		1	
	家	9	9	0	2		1	
	伊	2	1	1				
	高嘉	1	0	1				
	京中	1	0	1				
發 展 期	寂	11	5	6	2	1		
	梅	16	15	1	2		1	
	毘	70	41	29	6		1	
	高貞	32	22	10	5			
	京祕	4	3	1				
	祕注	3	0	3				
	訓	36	13	23	2	3	1	1
衰 微 期	天惠	4	3	1				
	尊惠	5	1	4		1		
	清聞	4	2	2				
	清聲	1	1	0				

(秋永一枝 (1974) に基いて作成)

(略記號について 問答=古今問答、顯天平=平假名本顯昭古今集注、顯天片=片假名本顯昭古今集注①、顯大=片假名本顯昭古今集注②、顯府=顯昭古今集序注、伏片=伏見宮本古今和歌集、家=家隆本古今和歌集、伊=伊達家本古今和歌集、高嘉=高松宮嘉祿本古今和歌集、京中=中院本古今和歌集①、寂=寂惠本古今和歌集加注、梅=梅澤家本古今和歌集、毘=毘沙門堂本古今集註、高貞=高松宮家貞應本古今和歌集、京祕=古今祕注抄、祕注=古今集祕註、訓=古今訓點抄、天惠=堯惠本古今集聞書、尊惠=堯惠本古今集聲句相傳聞書、清聞=古今私祕聞内聞書の部分、清聲=付頓阿眞筆古今集聲句點)

ある。

ここで、秋永一枝 (1991) の示す、『古今和歌集』聲點本に見える動詞に、「助詞テ」が後接する場合の「連用形」アクセントを纏めると次の様になる。

表6 「助詞テ」が後接する場合の「連用形」アクセント

終止	1拍	第一類	F(L)>H(L)	消、爲、寢
		第二類	H(H)	得、來、出、經、綜
終止・連用	2・1拍	第一類	F(L)>H(L)	着る、似る、噓る、居る
		第二類	R(H)>H(H)	干る、見る
終止・連體	2拍	第一類	HL	咲く、散る……
		第二類	LF	飽く、切る……
		第三類	HL	をり
	2・3拍	第一類	HL	明く、暮る……
		第二類	LF	起く、戀ふ……
		第三類	HF	ナ變動詞
	3拍	第一類	HHL	當る、暮らす……
		第二類	LLF	思ふ、歸る……
		第三類	*LHL	罷る、隠る……
	3・4拍	第一類	*HLL	聞こゆ、忘る……
		第二類	LLF	眺む、別る……
		第三類	LHL	隠る、詣づ……
第四類		HLL	振り出づ……	

(秋永一枝 (1991) を元に作成)

() 内は助詞のピッチを示す。猶、表2同様に、私にトネーム表示を英字表示 (アクセント素表記) に改めた。*は想定形。

秋永一枝 (1991) では、この後に更に出来上り4拍以上の動詞について言及されて居るが、表3含めて纏めると終止形一拍動詞第二類と終止・連用形二・一拍動詞以外、古いアクセントでは「助詞テ」の前で下降する。その問題となる終止形一拍動詞第二類と終止・連用形二・一拍動詞に「助詞テ」が後続した例も存在するので、実際のところ、「助詞テ」は表5から知られるところよりも、固有のアクセントを保つて居たと考へられる。表7を参照。

さて、終止形一拍動詞第二類と終止・連用形二・一拍動詞以外では、「助詞テ」が固有のアクセントを失つてゐるのならば平聲點が差され、低平調で現はれる筈であるが、訓本以外は何れも上聲點が優勢であり、基本的に「助詞テ」はまだ固有のアクセントを保つて居ると考へられる。

訓について考察すると、訓は發展期の中でも後期の嘉元三年 (1305) に成立してをり、當然ながら平聲點の方が優勢になる。また、秋永一枝 (1991) ではこれのみならず、「他書とは異なる著作方法の投影でもあり、著者度会延明の生育地であろう度会郡の方言アクセントの反映でもあろう」とも述べられてゐる。

表7 『古今和歌集』 聲點本「助詞テ」に対する差聲状況（改訂）

	略稱	全 體			爲		寢	
		總計	上聲點	平聲點	上聲點	平聲點	上聲點	平聲點
草 創 期	問 答	4	3	1				
	顯 天 平	10	7	3		1		
	顯 天 片	3	0	3				1
	顯 大	1	0	1				1
	顯 府	4	2	2	1			
	伏 片	30	26	4				1
	家	9	9	0				
	伊	2	1	1				1
	高 嘉	1	0	1				1
	京 中	1	0	1				1
發 展 期	寂	11	5	6				3
	梅	16	15	1				1
	毘	70	41	29		2		1
	高 貞	32	22	10		1		
	京 祕	4	3	1				1
	祕 注	3	0	3				
	訓	36	13	23		1		1
衰 微 期	天 惠	4	3	1			1	
	尊 惠	5	1	4			1	
	清 聞	4	2	2			1	
	清 聲	1	1	0			1	

（秋永一枝（1974）を元に作成）

此の様な状況を見るに、『古今和歌集』聲點本各本の聲點によつて知られるアクセント体系を持つ言語は、差聲者の生育地などの問題もあり、一概には出来ないが、基本的には「助詞テ」がまだ固有のアクセントを失つて居ないけれども、次第に失ひつつある段階の言語からほぼ失ひつつある言語それぞれであり、前者は秋永一枝（1991）の見解に従へば院政期日本語であり、後者は鎌倉時代（恐らくは前期の）日本語であらう。

さて、先の検討課題に戻ると、『古今和歌集』聲點本を見る限りでは、「助詞テ」は獨立のアクセントを基本的には保つて居るのであるから、「倚辭」になつて居るとはいひがたい。では、まだ院政期においては「自立語」なのであらうか、それとも「語」の内部要素である「付屬語」なのであらうか。それは『類聚名義抄』諸本を検討することで明らかになるだらう。

4.2 『類聚名義抄』諸本に見える「助詞テ」のアクセントと院政・鎌倉時代に於ける「音便」

ここでも、先づはマクロな観点から「助詞テ」が固有のアクセントを失つて居るか否かを考察を加へ、「音便」の問題に進んで行きたい。

表8は『類聚名義抄』諸本における「助詞テ」に対する差聲状況を、望月郁子（1974）に基づいて纏めたものである。

全体を通してみても、『古今和歌集』聲點本でも鎌倉時代までに差聲が行はれた諸本同様、上聲點が一般に差されてをり、此の様な點からも『古今和歌集』聲點本の差聲時期と、その反映するアクセントは秋永一枝（1991）の言ふ通り、院政期及び鎌倉時代と考へて良い様である。また、この時代には「助詞テ」のアクセントは、この例を見る限りにおいては、まだ固有のアクセントを保つて

表8 『類聚名義抄』の「助詞テ」に対する差聲状況

	略稱	全 體				副 詞		も て	
		總計	上聲點	平聲點	他	上聲點	平聲點	上聲點	平聲點
原撰本系	圖書寮	32	28	2			2	2	
改撰本系	高山寺	13	9	2				2	
	鎮 國	Ⅱ	4	3	1				
		Ⅲ	5	5	0				
	觀智院	佛上	7	4	1				2
		佛中	2	0	1				1
		佛下本	10	7	2				1
		佛下末	4	0	1	東1?			2
		法上	4	3	1				
		法中	4	3	0				1
		法下	4	2	1				1
		僧上	0	0	0				
		僧中	3	3	0				
僧下	6	4	0				2		
字 鏡	一	2	2	0					
	二	5	5	0					
	法華經	3	3	0					

（望月郁子（1974）に基いて作成）

（略記號について 圖書寮＝圖書寮本、高山寺＝高山寺本、鎮國＝鎮國守國神社本、字鏡＝岩崎本字鏡、法華經＝法華經單字）

みると考へて良ささうである。

ところで『類聚名義抄』諸本は、『古今和歌集』聲點本には見られなかつた、「音便」形+「テ」に對する差聲が見られる。以下にその例を擧げる。

- (7) a. 玲瓏 カ、ヤイテ
上上上平上 (圖書寮本一六一六)
- (7) b. 越 オイテ
上平上 (高山寺本三五ウ六)
- (7) c. 續 エカイテ
平平上平 (觀智院本法中一一六八)

問題は上聲點が差され、「助詞テ」が固有のアクセントを保つて居ると見られながら、「音便」が生じてゐる所である。

これには次の様な考へ方があり得る。即ち、

(10) ここに現はれて居る「助詞テ」は動詞内部の一要素であるが、固有のアクセントを持つ「付屬語」である。従つて「助詞テ」は「自立語」から「倚辭」になつたのではなく「自立語」から「付屬語」になつた後、「接辭」となつた。

(11) ここに現はれて居る「助詞テ」は動詞外部の要素である「自立語」である。従つて「助詞テ」による「音便」は「テ」の動詞内部への取り込み如何とは無關係である。

筆者は(10)(11)どちらの見解も取らず、次の様な見解を取る。即ち、

(12) 動詞+「助詞テ」の「テ」は「自立語」、「付屬語」或いは「倚辭」である平安時代の状態から、院政期に「自立語」、「付屬語」或いは「接辭」となり、鎌倉時代には「接辭」として動詞内部に取り込まれた。^(注8)

基本的に、「自立語」「付屬語」等の形態論上の諸單位の内の何れかに「形態素」は屬する。しかし、「助詞テ」は平安・院政期を通じて文法化の過程にあり、ある場合、或いはある人物に於ては「自立語」であり、また「付屬語」でありといふ状態が存在してゐたと思はれる。また此の様な見解を取るべきである理由は次の通りである。

(10)の見解を取ると、『琴歌譜』に現はれた「出でて」の「助詞テ」に對する「下」注記が説明できなくなる。^(注9)

また、(11)の見解を取ると、打消の「助詞テ」が全く「助詞テ」と獨立して生じたと考へることになり、兩者の關聯性が捉へられない。

しかし、後者についてはこれだけではまだ全く獨立して打消の「助詞テ」と「助詞テ」が存在して居ると考へられるので、次章に於て、まづこれについて述

べ、その後で個別の、これまでの議論の反例に見える例について考察を加へて行く。

5. ミクロな観点からの検討

5.1 「助詞テ」と「ズテ」と打消の「助詞デ」

「助詞テ」についてはこれまで見てきた通り、『日本書紀』聲點本、『古今和歌集』聲點本、『類聚名義抄』諸本では、基本的に上聲點が差されて居ることから、(動詞内部の一要素であるかは分らないが、) まだ固有のアクセントを持つて居たと考へられる。

ところが、『琴歌譜』には固有のアクセントを失つたとみられる「出でて」の例が見られ、『古今和歌集』聲點本及び『類聚名義抄』諸本とでは、いはば「逆轉現象」が見られる。

また、聲點は差されてみないのでアクセントは不明であるが、「助詞テ」による動詞の「音便」は、早くも850年ごろの訓點資料の一つ『四分律行事鈔』^(註10)に、(13) 壅 フサイテ

の例がある。

そして打消の「助詞デ」はほぼ同じごろの成立と考へられてゐる『竹取物語』にまづ現はれる。

(14) いますかりつる心ざしどもを、思ひも知らで(竹取物語)

打消の「助詞デ」は後續する動詞の内部要素が存在しないので、動詞の右端に現れる「屈折接尾語」であり、ちようど動詞の内部要素となつた(つまり「付屬語」或いは「接尾辭」である)「助詞テ」とは極性のみによつて對立する形態素である。

つまり、「助詞テ」によつて生じたと考へられる「音便」の發生と否定(屈折接尾語或いは屈折接尾辭)の「デ」(打消の「助詞デ」)の發生はほぼ同時期であり、「助詞テ」の動詞内部への取り込みが、極性において對立する否定の「デ」(打消の「助詞デ」)を生じさせたと考へられる。

此の様な狀況からは、『類聚名義抄』諸本に見える上聲點が差され、且、「音便」が生じて居る「助詞テ」を「自立語」と考へるのは得策ではない。^(註11)

更に「ズテ」に就て考察を加へて行くと、やはり先の(12)の見解を取るべき事が知られる。

「ズテ」は上代より用例が存在するが、中古以降は歌謠を除いて餘り用ゐられなくなる。しかし、實際のところ、1000年ごろ成立の『源氏物語』や1120年ご

る成立の『今昔物語集』の地の文に於ても「ズテ」の用例が存在する。

(15) あひ見ずてしのぶるころの涙をも (源氏物語「賢木」)

(16) 忽二可行き方不思エテ、(今昔物語集卷第十七)

「ズ」が動詞内部要素である「屈折接尾語」或いは「屈折接尾辭」であるので、この頃まで「テ」は動詞外部の要素でもあつたと考へられる。一方で、鎌倉時代語の資料として用ゐられる『平家物語』には用ゐられず、『建禮門院右京大夫集』等の「文語」文獻に用ゐられる程度であり、『類聚名義抄』諸本を見るに、動詞内部の一要素となつて居るとみられる例が以下の様に見られることから、院政期には「動詞」が先行する場合、「助詞テ」は「接尾辭」にもなつてゐたものとみられる。

(17) 懂^(注12) カツテ

平上平 (圖書寮本二七四4)

また平安時代を通じて、「助詞テ」が後接した動詞は非「音便」形でも、「音便」形でも現はれてをり、同一の作品でも両者が現れる。

此の様な状況からは、やはり先の(12)が妥當であると考へたほうがよいだらう。以上を表の形式で纏めると次の様になる。

平安時代	肯定	否定
内部要素	て (付屬語)	で
外部要素	て (自立語, 倚辭)	ずて

院政期	肯定	否定
内部要素	て (付屬語, 接辭)	で
外部要素	て (自立語) ^(注13)	

鎌倉時代	肯定	否定
内部要素	て (接辭) ^(注14)	で

平安時代の「助詞テ」が語の外部要素であり「倚辭」であるならば、他に「助詞テ」が獨立のアクセントを失ひ、且、動詞以外の品詞に屬する「語」が先行する例が存在するはずであるが、今回の調査範圍では、その様な例と見られるものが存在しなかつた。しかし、この時代には「ずて」の例が存在し、『古今和歌集』聲點本の内、毘では

あるが、次の様な例が存在する。

(18) みえすて

平上平平

(1) a、(18)の例から、少なくとも平安時代には「倚辭」としての「助詞テ」が存在したと考へたほうがよいだらう。

院政期には、『今昔物語集』の例を除いては、「ずて」が見られなくなり、「動詞」+「テ」の「助詞テ」は動詞内部の一要素となつたと考へられる。先に挙げた圖書寮本『類聚名義抄』の「カツテ」の例は、接辭化したものであらう。

また、「助詞テ」によつて生じたと考へられる「音便」の發生と否定の（「屈折接尾語」或いは「屈折接尾辭」）「テ」（打消の「助詞テ」）の發生はほぼ同時期である事から、3.1に述べた豫想「助詞テ」の動詞内部への取り込みが「助詞テ」による「音便」形を生じさせてゐるのではないか」には妥當性があると考へられる。

一方で、1. でのべた豫想「助詞テ」の「接辭化」即ちアクセントの消失の過程と「助詞テ」による「音便」現象の發生は並行的現象ではないか」は、『類聚名義抄』諸本に對する差聲狀況から、採り得ない事が知られる。

5.2 その他個別の問題——反證か例外か——

ところで、これまで述べてきたところの反例となる様な例は存在するのだろうか。實はその様に見えるものが存在しない譯ではない。

3.2で考察しなかつた「シテ」もその一つである。「シテ」の「助詞テ」に對しては、『日本書紀』聲點本にも差聲した例が存在し、平聲點を差したものも存在する。

ところが、平聲點を差聲した例と同様に上聲點を差聲した例も存在し、また、用例數は拮抗してゐるので、結局、搖れてゐることが知られる。

一方で、『古今和歌集』聲點本を見ると、表7に見える様に、**顯府**を除いてすべて「助詞テ」に對しては平聲點が差されてゐる。

つまり、『古今和歌集』聲點本の反映するアクセントよりも、「助詞テ」の差聲狀況から『日本書紀』聲點本の反映するアクセントの方が古いと結論される。

また、「着て」であるが、『日本書紀』聲點本では「助詞テ」に對して、差聲のある前田本以下の諸本では平聲點が差されてをり、ピッチは [L] であつたと考へられるが、圖書寮本『類聚名義抄』では「助詞テ」に對して上聲點が差されてゐるので、こちらのピッチは [H] と考へられる。此の様な例からすると、圖書寮本『類聚名義抄』の方が『日本書紀』聲點本よりも古いアクセントを保つてゐるとも考へられるが、先に觸れた様に、圖書寮本『類聚名義抄』には「カツテ」の「助詞テ」に對して平聲點が差されてゐる。

他に、『日本書紀』聲點本では「聞かして」に、前田本以下の諸本で「助詞テ」に對して平聲點が差されてをり、「テ」が固有のアクセントを失つてゐると考へられる。

しかし、これも先の「着て」に對する差聲同様、差聲されてゐるのは前田本以下の諸本である。恐らく、前田本に移點される際に移點者のアクセントが混

ざつたのであらう。

5.1の議論を踏へると、「シテ」の「助詞テ」のピッチが揺れてゐるところを見ると、上代のある時期までは、完全に「助詞テ」は「自立語」であつたであらう。

結局3.4の(3)(5)は支持されうるが、(6)は支持されないと云ふ結論が得られる。

6. 結論と今後の課題

本稿では、次のことを述べた。

(19) 『日本書紀』聲點本から『四座講式』までのアクセント資料に見える動詞 + 「テ」の「助詞テ」を検討し、上代のある時点まで「助詞テ」は「自立語」であつたが、平安時代に入り「付屬語」化及び『琴歌譜』に見られる様な「倚辭」化した「助詞テ」が見られる様になる。

そして、院政期には「付屬語」としての「助詞テ」と「自立語」としての「助詞テ」、そして「接辭」としての「助詞テ」が見られる様になり、最終的には『四座講式』に見える様な「接辭」としての「助詞テ」となつたと見られる。

(20) 『琴歌譜』に於て既に「助詞テ」自身の固有のアクセントが失はれてゐる「出でて」が存在してゐるが、『日本書紀』聲點本では同じ「出でて」では失はれてゐない。ここから、『日本書紀』聲點本の聲點から知られるアクセントは、貞觀年間以前の體系である可能性がある。

(21) 「助詞テ」によつて生じたと考へられる「音便」の發生と否定の（「屈折接尾語」或いは「屈折接尾辭」）「テ」（打消の「助詞テ」）の發生はほぼ同時期である。ここから「助詞テ」の動詞内部への取り込みが、「助詞テ」による「音便」形を生じさせてゐると考へられる。

また、課題としては、『日本書紀』聲點本の聲點が示すところから知られるアクセントが、弘仁以降貞觀以前のどの言語の體系であるのか確定する作業が残つてゐる。

5.2迄の議論では、直接的には言及しなかつたが、文法化の過程では恐らく「自立語」から直接「接辭」となるのではなく、「付屬語」或いは「倚辭」を經由して「接辭」となるものとみられる。そしてその過程では、ある語が「自立語」でもあり「付屬語」「倚辭」でもある状況が存在したと考へられる。

言語變化は初期においては徐々に進行し、ある時期を境に一氣呵成に生じる

とも言はれるが、本稿で検討するところでは、一度バラバラな状態を経た上で、ある時期に一氣にある方向へ向かつて變化し、そしてその變化は迅速に完了すると言ふ場合もあつたのではないかと思はれる。

本稿は飽く迄「助詞テ」と「音便」とアクセントの歴史と關連、そこから得られる『日本書紀』聲點本の聲點から知られるアクセントの年代の考察であつたが、最終的には文法化の過程についても言及した。本稿が此の様な方面にも役立てば幸である。

(注1) 金田一春彦(1969)に『四座講式』に於て「助詞テ」が高く付かず低く付く例が擧げられてをり、そこでサ行四段活用動詞であることが、低く付く原因と述べられてゐる。更にその原因は、サ行變格活用+「テ」への類推であると述べられてゐるが、その後には次の様に述べられてゐる。
「中世、四段活用動詞に「テ」のついた形は、原則として音便形をとつたが、サ行のものだけには徹底的に起こらなかつたようで、恐らくそのこととも關係があるう。」

形態音韻論的現象とアクセントの關係について、明示的に述べられてゐるのは、このくらゐのものでは無いだらうか。

(注2) 此の點に關しては、下地理則先生のご教授による。ただし、若干の相異はある。これは、アクセントをどう見るかの差である。

(注3) この例の「助詞テ」のピッチについては、若干の問題が存在する。金田一春彦(1969)の545頁では、「助詞テ」のピッチは[F]であつた可能性について述べてゐるが、結局「たしかにそうだという証もない。わからないと言わざるを得ない。」と述べてゐる。これは節博士に下降拍を表す独自の記號が存在しないのがその原因であるが、しかし、同557頁の表では、LH型に付いたときは「助詞テ」のピッチを[H]としてゐる。本稿でもこれに従ひ考察を進める。

(注4) 「助詞テ」による音便の發生が上代特殊假名遣の消滅とほぼ同時期に生じてゐる點も注目すべきであらう(築島裕(1987)を参照)。

(注5) 此の點に關しては、金田一春彦(1983)も参照されたい。そこでは、高山倫明氏の研究を参照し、「奈良時代の日本語のアクセントは、平安時代のアクセントと大分ちがったものだったろう」という説があつたが、それはいっぺんに吹き飛んでしまった」と述べてゐる。

(注6) 猶、筆者は「助動詞ズ」を「屈折接尾語」と考へてゐる。これは、「屈折接尾辭」の場合には3拍以下と4拍以上でアクセント交替が見られるが、「助動詞ズ」と「助詞バ(未然形接續)」ではアクセント交替が生じないからである。これは、文法語末に「助動詞ズ」が現はれた場合、そのアクセント情報によつて必ず文法語末が低く實現するから、交替を實現させる必要がない爲であらう。

(注7) 築島裕(1969)は平安時代初期訓點資料に、既に「助詞テ」が後接した「音便」形が見られることを述べてゐる。

(注8) 母音語幹動詞の場合には、「倚辭」かも知れない。その理由については動詞屈折全體の考察が必要であるので、また別稿で述べたい。

(注9) 無論歌謠であるのでアクセント通りに節付されなかつた可能性もあるが、現状で

は、どのような場合にアクセントを破壊する形での節付がなされたか不明であるので、今はその可能性を考へない。

(注10) 他に810年ごろの『願經四分律』には

(22) 次 ツイテ

の例が見られるが、副詞化して居るかも知れないので、例としては用いるない。

(注11) 猶、これまでの生成文法の研究においても、テ形は//四段動詞語根-te//と考へられてをり、此の點も「助詞テ」による「音便」の發生を、動詞内部の一要素となつたためと考へるサポートになるのではなからうか。

(注12) 「曾て」とも考へられさうであるが、『大漢和辞典』でこの漢字の意味について確認したところ、

(一) さとくない。おろか。

(二) そむきもとる。

(三) かたくな。

(用例は何れも略)

であり、「カツテ」は動詞「音便」形であると考へられる。

猶、促音便の「ツ」表記であるが、築島裕(1969)によれば、1099成立の『大慈雲寺三藏法師傳』に、

(22) 規 ノツトリ(テ)

の例が見られ、およそ此の頃から一般的ではないが、現はれてくる。圖書寮本『類聚名義抄』の例は、この早い例と考へる。

(注13) 注8の通り、母音語幹動詞の場合に「倚辭」であれば、院政期の表は次の通りに改められる。

院政期	肯定	否定
内部要素	て(付屬語, 接辭)	で
外部要素	て(自立語, 倚辭)	

(注14) 院政期同様に、「倚辭」としての「助詞テ」が存在するかも知れない。

参考文献

BOOIJ, Geert (2012) *The Grammar of Words: An Introduction to Linguistic Morphology*. 3rd ed. New York: Oxford University Press.

秋永一枝(1974)『古今和歌集声点本の研究 索引篇』校倉書房

秋永一枝(1991)『古今和歌集声点本の研究 研究篇 下』校倉書房

秋永一枝他編(1998)『日本語アクセント史総合資料 研究篇』東京堂出版

沖森卓也(1985)「琴歌譜の音の高低に関する符号について」『国文白百合』16

金田一春彦(1969)『四座講式の研究』金田一(2005)再録

————(1983)「方向観による平安朝アクセント」金田一(2001)再録

————(2001)『日本語音韻音調史の研究』吉川弘文館

————(2005)『金田一春彦著作集 第五卷』玉川大学出版部

小松英雄(1981)『日本語の世界 7』中央公論社

迫野虔徳(1971)「カ行イ音便の形態的定着」迫野(2012)再録

————(2012)『方言史と日本語史』清文堂出版

鈴木 豊(2010)「日本紀講書とアクセント——『日本書紀』声点本の成立に関する考察

—」『論集Ⅵ』アクセント史資料研究会

- 築島 裕 (1969) 『平安時代語新論』 東京大学出版会
—— (1987) 『平安時代の国語』 東京堂出版
土橋 寛 (1978) 「古楽古歌謠集 解説 琴歌譜」『古楽古歌謠集』 思文閣出版
坪井美樹 (2007) 『日本語活用体系の変遷 増訂版』 笠間書院
西宮一民 (1959) 「琴歌譜における二、三の問題」西宮 (1970) 再録
—— (1970) 『日本上代の文章と表記』 風間書房
望月郁子 (1974) 『類聚名義抄四種声点付和訓集成』 笠間書院
屋名池誠 (2004) 「平安時代京都方言のアクセント活用」『音声研究』8 (2)

依據文献

- 『日本書紀』 聲點本
鈴木豊編 (1988) 『日本書紀神代卷諸本 声点付語彙索引』 アクセント史資料研究会
鈴木豊編 (2003) 『日本書紀人皇卷諸本 声点付語彙索引』 アクセント史資料研究会
『琴歌譜』
土橋寛他解説 (1978) 『古楽古歌謠集』 思文閣出版
『古今和歌集』 聲點本
秋永一枝 (1991) 『古今和歌集声点本の研究 研究篇 下』 校倉書房
『類聚名義抄』 諸本
望月郁子 (1974) 『類聚名義抄四種声点付和訓集成』 笠間書院
平安時代語文献
Japan knowledge (2014/11/1から11/14閲覧) 『新編 日本古典文学全集』 小学館

(かさま ゆういちろう・本学大学院修士課程)